

# 臨画・臨書

～お手本通りに描（書）く～

お手本となる絵をよく見て、お手本通りに絵を描き写すことを「臨画」と言い、明治期の図画学習の中核でした。また、書道で、お手本を傍らに置き、字形や筆遣いなどをよく見て字を練習することを「臨書」と言います。

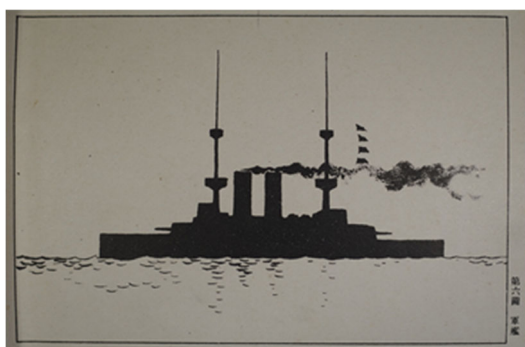
今月の小展示では、当館所蔵の児童の作品と、そのお手本となった教科書を紹介します。作品とお手本を見比べて、当時の学びの一端を感じ取ってみてください。

## 1. 臨画(りんが)

明治時代の図画教育は、お手本となる絵を、全くそのままに描き写す臨画を中心に行われました。その題材は、幾何学的な図形や動植物など様々です。こうした臨画中心の図画教育に対して、大正時代に入ると、自由な写生などを取り入れようとする自由画運動が起こります。

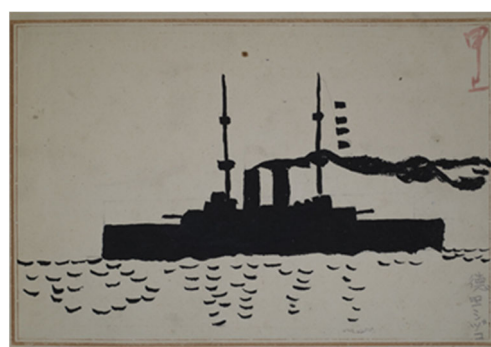
〔軍艦〕

教科書



「尋常小学新定画帖帳 第3学年 児童用」  
(徳田家文書 246)

児童作品

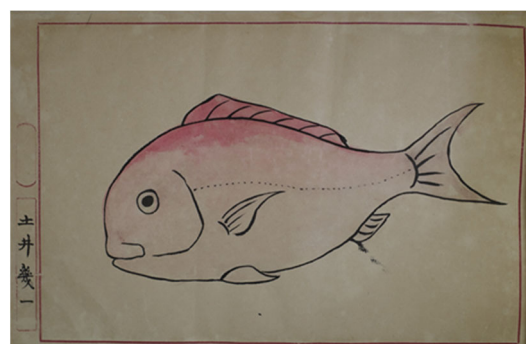


「図画練習帳」(徳田家文書 245)

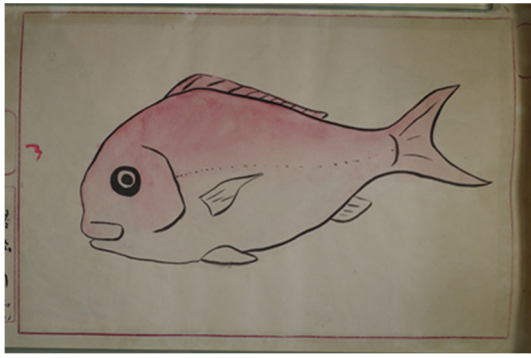
〔タイ〕



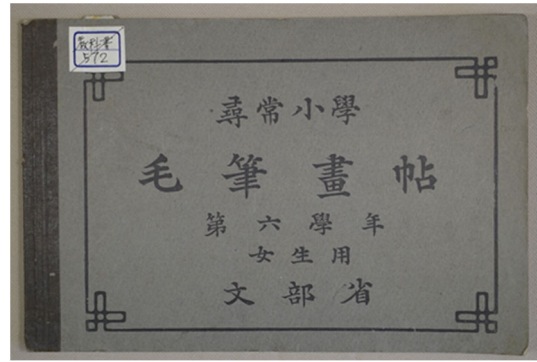
「尋常小学毛筆画帖 第五学年女生用」  
(教科書文庫 明治 43-16)



「第三回学芸展覧会成績品図画部」  
(小野家文書 409-8)



「第三回学芸展覧会成績品図画部」  
(小野家文書 409-8)※他の児童の作品



「尋常小学毛筆画帖 第五学年女生用」  
(教科書文庫 明治 43-16)

## 2. 臨書(りんしょ)

### 「尋常小学書キ方手本 第四学年用下 甲種」と児童作品

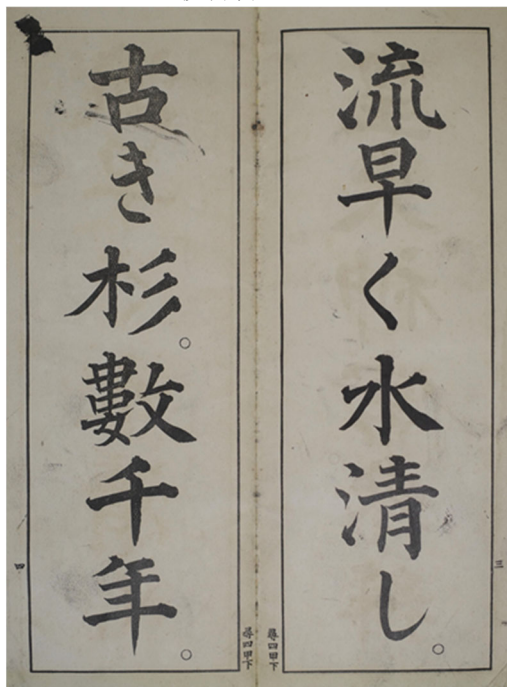
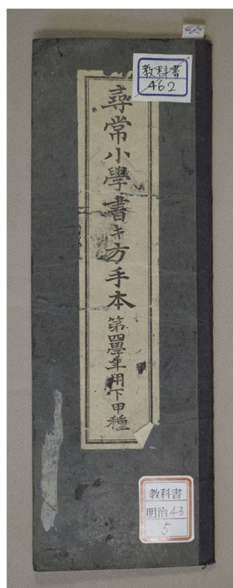
明治 43(1910)年刊行の「習字」の国定教科書とそれをお手本にした児童の作品です。

基本的には国定教科書は教科ごとに一種類のみでしたが、「習字」だけは例外で「甲種」と「乙種」の2種類あり、選択が可能でした。

甲種は日高秩父の筆により、彼の書の特徴は『近代日本の教科書のあゆみ』(滋賀大学附属図書館編)によると、「起筆、終筆、転筆、はねなどに「力こぶ」が入ったような筆法(顔真卿の筆法)で書かれた力強い書風であった。しかし、現場では教えにくいという不評を買っていたようである」とあります。乙種は香川松石の筆で、こちらは「力こぶ」のない易しい書きぶりでした。

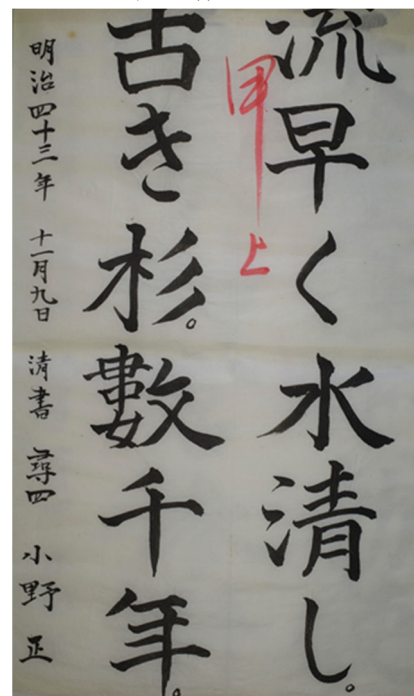
展示史料は甲種の教科書で、児童の作品をみるとお手本通り、起筆、終筆などに「力こぶ」がしっかりと意識して書かれています。

教科書



「尋常小学書キ方手本第四学年用下甲種」(教科書文庫 明治 43-5)

児童作品



「習字帳」(小野家文書 412)